

マスクしても一人

越 川 弘 英

奨励者紹介[こしかわ・ひろひで]

同志社大学キリスト教文化センター教授

[研究テーマ]キリスト教の実践神学(礼拝、宣教、牧会)

主なる神は言われた。

「人が独りであるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

(創世記 2章 18 節)

「マスクしても一人」

尾崎放哉の俳句で「咳をしても一人」という句があります。先日新聞を読んでいたら、これをもじって「マスクしても一人」と書いていた記者がいて、今回の奨励題はそれをもらいました。

今回の新型コロナウイルス(以下「コロナ」とします)をめぐるいろいろな話題が飛び交いましたが、やはりいちばん印象に残っているのはマスクではないでしょうか。自分の家、学校の研究室に独りであるのにマスクをしている。後でそれに気づいて、「マスクしても一人」あるいは「一人でもマスク」。最近、外を歩いているとマスクをしていない人も増えている感じですが、逆にマスクをするのが習慣になってしまった人もいるかもしれません。

コロナと私たちの関係はまだこれから先も続くことになりますが、私自身、例年とはまったく違う春学期を過ごしてきて新たに気づいたこと、私にとって明らかになったことのいくつかを今日はお話したいと思います。

明らかになったこと(1)

コロナ禍を経験して明らかになったことの一つ。それはやっぱりこの状態はふつうじゃないということです。当たり前のことですが、この状態は「非日常」です。そして皆さんも同感してくれると思うのですが、「日常」というものを失ってみて、改めてこれまで当たり前と思っていたこと、ふつうと思っていたことが、いかに貴重なことだったかということに気づかされました。コロナを経験した私たちが皆、明らかに意識させられたことだろうと思います。

大学の授業では秋学期から「対面授業」を復活させる方針です。考えてみれば、「対面授業」などという言葉そのものがあまり使ったこともない、意識したこともない、耳慣れない言葉です。私は20年近く大学で働いてきましたが、学生の皆さんと一緒に、一つの空間と時間を共にして教える・学ぶ・話し合うということを当たり前のこととして過ごしてきました。それが実は当たり前ではなかったことをこの春学期に思い知らされました。

5月からはすべての授業がオンライン授業に切り替えられました。私は還暦を超えたこの年になって、「ユーチューバー」デビューしたと言って子どもに笑われましたが、そんなことはまったく予想もしなけれ

ば、やりたいと思っていたことでもありません。

実際、オンデマンドの画像を作って毎週配信したり、Teams とやらでゼミをやっているのですが、正直なところ、あれは本当に「授業」と言えるのかという、心のどこかでクエスチョン・マーク(?) が飛び交っている感じがしています。もちろんネット授業のメリットもあるのですが、少なくとも私の今までの経験や感覚からすると(受講している方たちには申し訳ないのですが)「授業のようなもの」というところに留まっている気がします。

さらに言ってしまうと、今このチャペル・アワーを見てくださいている方には大変失礼ではありますが、これもまた本当に「チャペル・アワー」なのかと感じざるを得ないところがあります。誰一人、今このチャペルの中にいない。皆で賛美歌も歌わない。これもまた「チャペル・アワーのようなもの」なのかもしれません。

振り返ってみて思うのは、去年まで私たちが経験してきた授業やチャペル・アワー、そしてサークル活動やさまざまな大学の中の生活というのが、実はとても貴重なものだったのだということです。私たちが当たり前だと思っていたものの貴重さ大切さを、このコロナの経験はまず第一に明らかにしてくれたと思います。

明らかになったこと(2)

次にコロナによって明らかになってきた第二のこととして、私たち人間の弱さや身勝手さ、この社会の矛盾や問題、つまり私たちの世界の暗い部分に対する気づきがあったように思います。

マスクで言えば、買い占めや高額転売ということが起こりました。「自粛警察」という話題も覚えておられるかと思います。コロナを使って詐欺や悪徳商法のようなものが起こりました。私たち人間の中にある不安や弱さが利己的な行動に走らせたり、おかしな正義感や同調圧力の働きが過剰な反応を引き出したり、ただただ自分の利益だけを求める欲望が人をだまし傷つけることもいとわなかったりするということなのでしょう。人間というものの中にある暗い部分、聖書はそれを「罪」と呼びますが、こうしたコロナという出来事の中で人間の弱さ、暗さ、恐ろしさ、だめな部分があらわになる、明らかにされるということも起こったように思います。

より広い視野からすれば、社会的にまた経済的に、もともと弱い立場にいた人々に対して、このコロナの災いはより重く大きなかたちでのしかかっています。日本の国内でもそうですが、今現在、そして今後、世界中でもともと貧しい国々、日常生活や医療制度においてもともと厳しい状況に置かれてきた地域などで、このコロナによって直接または間接に影響を受ける人々、犠牲となる人々が増加しています。そんなふうにこのコロナの出来事は、私たちが生きている世界がさまざまな矛盾、格差、差別などに囲まれているという事実、その事実をむきだしのかたちで示したように思います。聖書がいう「罪」の中には、こうした社会的構造的な次元における問題も含まれているのですが、その意味においても、コロナは人間とこの世の罪を明らかにしたという面があったように思います。

明らかになったこと(3)

さて、コロナの経験が私たちに明らかにした第三のこととして思うのは、予想もしなかった事態の中で、人間と社会の暗い面があらわにされると同時に、私たち人間の明るい面もまた示されることがあったとい

う事実です。ふだんの生活を奪われた日々の中で、人と人が親しくかわることを禁じられた状況の下で、それでも多くの人々が自分のできる範囲でこの事態に向き合い、それぞれに果たすべきことを誠実に果たしている姿を、私たちは目にし、また耳にしてきました。それは決して医療や看護などの特定の仕事に携わる人々だけのことではありません。コロナという状況のもとにある私たちの多くが、多かれ少なかれ、忍耐し、経験し、実践してきたことなのです。

こうしたことに関して、カトリック教会のフランシスコ教皇が今年の3月 27 日に発信したメッセージの一節を紹介しましょう。

「聖霊のいのちは、わたしたちの生活が普通の人々、普段は目立たない人々によって織りなされ、支えられていることを見せてくれます。こうした人たちは、新聞や雑誌のタイトルを飾ったり、目立つ舞台に立つことはなくとも、わたしたちの歴史上の重大な出来事を今刻んでいる人たちです。それは医師や、看護師、スーパーマーケットの職員、清掃員、介護職の人々、交通関係者、公安関係者、ボランティア、司祭、修道者、そして、自分の力だけでは救われないことを知っている他の多くの人々のことです。(中略) 毎日どれだけ多くの人たちが、パニックを広めることなく、共同責任を自覚し、忍耐を示しながら、希望を皆に伝えていることでしょう。どれだけ多くの両親や、祖父母、教師たちが、子どもたちに日常の小さな行為を通して、習慣を変え、眼差しを上げ、祈るよう招きながら、この危機に対応し、過ごす方法を教えていることでしょう。どれだけ多くの人々が、皆のために犠牲を捧げ、取りなしを祈っていることでしょう。祈りと沈黙の奉仕、それはわたしたちを勝利に導く武器です」(VATICAN NEWS 「『主よ、嵐の中にわたしたちを見捨てないでください』教皇による黙想」 <https://www.vaticannews.va/ja/pope/news/2020-03/momento-di-preghiera-in-tempo-di-epidemia-omelia.html> 最終閲覧日 2020年7月19日) (傍点は筆者)。

たとえほんのわずかであっても隣人のことを心に留め、私たちは一人で生きているわけではないことを心に留め、私たちにできることをすることによって、私たちはお互いに生かしあうものとなります。

地下鉄の広告で、マスクをするのは自分のためだけでなく、周りの人々のためでもあるという言葉を読んだ時に、なるほど確かにそうだと思いました。そういう意味では、マスクもまた人が人と共に生きることの象徴となるのです。そこでは決して「マスクしても一人」というわけではありません。

聖書の中で、神は「人が独りでのびのびするのは良くない」とお考えになったと記されています。コロナが、またさまざまな力が、人と人とを引き離そうとする時に、そうした力に対して、忍耐と知恵をもって向き合い、人間と人間が信頼と希望をもって共に生きる世界を形作ることが求められています。コロナの出来事は、そうした問いとチャレンジを私たちに投げかけていると言えるかもしれません。

2020年7月 20 日 チャペル・アワー(インターネット配信)「奨励」記録